

土浦平和の会

ニュースNo. 134 2003年9月

発行 土浦平和の会
事務局 土浦市神立町2664-2
TEL 831-9122

8・15 終戦の日と予科練

今年も8月15日終戦の日“終戦記念日を考える土浦市民のつどい”がおこなわれた。

石岡市在住の軍事史研究家屋口正一さんの予科練に関するお話とまちかど蔵の館長鶴田さんのお話を聞いた。

屋口さんは終戦のころ学徒動員で第1海軍航空廠にいて6月10日の土浦阿見空襲を目撃し、この惨状を調査して後世に伝えようと、たくさんの関係者から聞き取りをおこない、言い伝えや憶測ではなく直接体験者のことば、目撃者の証言に基づいた正しい記録を残してきた方です。

屋口さんは「・・・とされている」という伝聞、孫引きの中に多くの間違いがあること、「阿見町史」のような公的な出版物もウソがあると語り始められました。常陽新聞のコピー資料(1998. 5. 8)や屋口氏の著書にも詳述されています。「空襲で犠牲になった予科練生は281人とされている。」は法泉寺の近くで遺体処理が行われた数であり、この中には予科練生だけでなく士官や軍雇用の民間人も含まれているという。この法泉寺に埋葬されたほかの犠牲者のあったことも考えられるが、その数は確認する方法がない。

「等身大の予科練」(常陽新聞社)

終戦の日を前にたくさんの著作が出版されている。「等身大の予科練」を読んだ。霞ヶ浦町在住の角田和男さんの体験は予科練(横空)から始まって霞空、・・・百里原空、・・・ラバウルでグラマンと戦い、命拾いして内地に帰り、再びフィリピンで特攻の誘導直援や戦果確認という役目を果たしてたくさんの特攻機の突入を見守った。最後は宮古島から沖縄へ全機500キロ爆弾で突入の命令が出たところで終戦になった。という生き残り組である。そのほか予科練体験者24人の記録が収められている。

新日本出版社の「特攻」(岩井兄弟)の「俺は死んでも天皇のためではないぞ。」「戦争に行くのは逃れられない宿命だ。これに逆らうことは不可能だという前提に立った上で、自分の死に何らかの意味を見いだしたいという願望」これが他に選択の余地のない、死に直面した若者たちのぎりぎりの選択であったのかと胸が締め付けられる思いである。(H)

活動ごよみ

8・29 土浦平和の会理事会(1中地区公)

9・1 県平和委常任理事会(水戸)

9・13 県平和委理事会()

9・13~15 平和の旅 in いわて part2